十年前の三月十一日
私がいた町は
震度6強の本震に始まる
巨大地震により
数千軒の家が壊れ
道が割れ

それら全てが
春の濡れ雪に
埋まりました

混乱の中
海沿いの町から
大勢の人がどっと
避難してきました

「遺体の横を
逃げてきた」

「お母さんがおばあちゃんを
助けに戻って
第二波にのまれた」

「原発が駄目らしい
家族を助けに戻れない」

止まらない余震の中
そんな声が飛び交って

仕事でどれだけ
レントゲンを撮っても

大学時代
放射性同位体で
実験していた時でさえ
変動することのなかった
個人線量計の数値が

初めて上がる日が来ました

「子供たちだけでも安全な場所へ」を合言葉に

供給が絶え心許ないガソリンで多くの人が必死に町を出ました

他県へと続く道沿いに

小奇麗な動物たちがぽつぽつと現れました

避難先に連れていけないからと途中で置いていかれたようでした

避難区域にはその比ではない数の動物たちが残されました

多くの人が着の身着のまま避難していました

避難バスには動物は乗れませんし

何よりまさかそのまま何年も帰ることができなくなるなんて想像もしていませんでした

彼らには後日救助の手が差し伸べられましたが

間に合わず
死を迎えて
しまった子も
たくさんいました

家族に会いに行きたくて
必死に前足で掘った
玄関扉の抉れた傷
すり減って割れた爪

健気に生きる動物たちだからこそ
飢えと孤独の果ての死は
ただただ痛ましいです

遠くでゆっくりと
息絶えていく彼らを
思うことしか
できなかった
飼い主さんたちの
心の痛みも
どれほどでしょう

三月十一日までごく普通に
寄り添って暮らしていたのに

避難区域周辺の
動物病院は
無人の町から救助された
犬たちでぎゅうぎゅうに
なりました

圧倒的フィラリア陽性率
しかも疥癬と同時感染
治療薬に悩む

かゆい

こうして連れ出して
もらえたこの子たちは
本当に幸運でした

支援物資の
海外メーカーのフード
まずいと不評

番犬や猟犬を
頑張っていた子たちは
スタッフに慣れない

家畜の移動は
認められませんでした

畜舎は
牛や豚の形をした
ウジの塊で埋まりました

繋留されず
生き延びた
家畜たちも
その後捕獲され

たくさんの人が
彼らの命を
守るべく
頑張ったのですが

殆どが
殺処分と
なりました

家畜を扱う農家さんは
自分たちの暮らしを
支えてくれる家畜たちを
大切にしています

物ではなく命を育て出荷している事を
誰よりも理解しています

生まれた体を拭いてやり
哺乳瓶でミルクを与え成長を見守り
一頭ずつの健康に気を配って
毎日毎日顔を合わせてきた
彼らの躯が溢れた畜舎に

どんな思いで
足を踏み入れた
のでしょう

地震からも津波からも生き延び
餌の少ない過酷な外界で
必死に命を繋いでいた家畜たちに

畜主の責任としての殺処分許可を出すのは
どれだけ無念だったでしょう

原発周辺には人と暮らしてきた生き物たちの死が無数にありました

けれど震災当時青二才の獣医師だった私はそれにあまり心を動かされることはありませんでした「たくさん死んでいるだろうなぁ」と時々考える程度でした

動物の死以上に人間の死とその予感が周囲に満ちていたからです

さんの赤ちゃん見つから…

堀川獣医

田

不明者500人

・不明者3000人

死者一万人超

建屋消失

メルトダウン

私はライトな被災者でした
親しい人に死者はなく
飼っていた犬猫も
職場で預かって貰えたので
別れはひとつもありませんでした

現在降っている
雪には
放射性物質が
含まれています

被曝を避ける
ため外出を
控えて下さい

自宅以外の
床で寝る生活も
僅か一ヶ月で
終わりました

余力はたくさん
あったはずでした
若く健康でした
大人でした

けれど驚異的に無力でした
雪の下で困っている人は
たくさんいたのに
すぐそばにいたのに

結局私には人命を救助することも
降ってくる放射性物質を止めることも
ぐちゃぐちゃになった町を直すことも
できないので
大きな避難所に薬とフードを
届けに行きました

こんな時に動物かと
言われても仕方ない
肩身が狭い思いで
中に入りました

動物がいました

車の中に

避難所の軒下に
廊下に

動物と
動物と寄り添う
人がいました

違う
贅沢品じゃない

持っていて
いいんだ

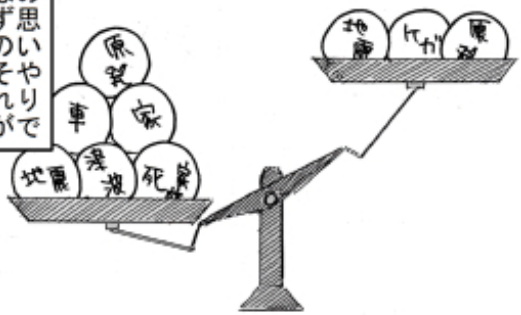
いいじゃないか
せめてこれくらい

家族や人生を
えぐり取られて

せめて
動物くらい
そばに残っていても
いいじゃないか

もうこれ以上何も
失わなくて
いいじゃないか

「もっと辛い人がいる」と
他人の苦しさで
自分の苦しさをはかる天秤



他者への思いやりで
できたはずのそれが
いつの間にか檻を
作ってしまっていて
その中で色んな事が
わからなくなっていました

他者の気持ちを尊重することと
自分をないがしろにすることは違うのに

生き残ることも
大事なものがたくさん
残っていることも
罪では決してないのに

世の中での重要度が
相対的に下がっても
自分にとって大切な物の価値は
変えなくていいはずなのに

ようやく
「よかったね」と
思えました

会えた事が
嬉しかったです

避難所で
ニュースを中断し
再生される
アンパンマンのビデオ

今必要な物を
聞かれて
女の子が答えた
アイドルの名前

嵐

「こんな時に」と
一蹴されてしまう
それらと同じ明るさ
なんだと思います

震災当日　余震の中
猫に会いに来た飼い主さん

病院にいて
よかった

家崩れてて

家にいたら
この子死んでた

あの人もその明るさを
失くすまいと
必死に悪路を越えてきたんだ

だって震災は
終わりではなく
始まりで

めちゃくちゃになった
今日から明日に
ひとりひとりが
向かわなければ
いけないから

動物たちが生きている事で
喪失と後悔からひとつ救われる
明るいものがひとつ増える

それは災害の
ど真ん中
だからこそ
とても大切な
ことなんだ

まずは人間です
人間が助かることが最優先です

そして私たちにある腕は二本だけです

幼い子を抱えれば埋まります

避難が困難な人の手を引けば他にもう何も掴めません

自分と身近な人を生かすだけで文字通り手一杯です

その上 非常時の動物たちは協力的とは言い難いです

猫は倒れた物の陰から出てきませんし

パニックを起こしやすい子は逃走してしまいます

限られた時間の中で彼らが安全に避難できる環境を整えるのはなかなかに困難です

そして避難所にも仮設住宅にも動物の居場所はありません

動物の存在が健康を害する原因になったり生活の妨げになる人もいるからです

人間社会において動物が人間を害することはあってはなりません

災害時に動物と共に生き延びることは個人の力では難しい本当に難しいです

避難所に行っても動物がいるなら他へ行って欲しいと受付すら断られたり

暴風雨吹き荒れる台風の中「動物は外に」とだけ指示され屋根も何もない場所で途方にくれたり

震災後も動物を伴っての避難を何度か体験しましたがそのたびに「動物は避難させるな」という空気をひしひしと感じました

「車内避難もやはり不可」と言われないよう他の避難者さんたちの目にできるだけ触れないひっそり生活を心がけました

「同行避難を基本とする」「ペットと一緒に避難できる事を知らない人が多いようだ」

後日見た環境省作成のガイドラインにそう書いてあって

ここまで乖離があるものかと驚きました

遠くの机上で同行避難が基本になっていても現実に連れていけないのなら置いて逃げるしかないです生き残るために

人以外の何を犠牲にしても守らなければいけないものが人命です

でも実際に
命の危機が迫った時

あなたの生存の
妨げになる
生き物たちを
即座に切り捨てる事が
出来るでしょうか

最も優先すべきものを
見失わずに
いられるでしょうか

あの日の私はその判断を誤りました

震度6強の揺れに襲われた時

子供の頃に見た阪神淡路大震災の
ニュース映像が甦り
「大地震では建物が崩れて死ぬ」
「中にいてはいけない」
と思いました

そこからの記憶はないのですが
あの揺れの中何をどうやったのか
屋内外を何度も往復して
病院中から動物たちを集めたらしく

気がついたら
院内の動物全員と
車に乗り込み
音を立てて走り去る
街並みを見ていました

出先から戻った先輩に怒られました

死ぬぞ ふつうに!

ミキサーで混ぜられたような院内の惨状を改めて見て背筋が寒くなりました

獣医療は人間の為の医療です
人間が必要と判断した生き物だけを助けます

若く優秀な牛
きちんと治療

廃用牛
無治療で屠場へ

患者のハムスター
全力で治療

実験用マウス
殺す

そんな動物の命にシビアな世界にいた私でさえ置いていくという決断は咄嗟にできませんでした

同じような方はたくさんおられるのではないでしょうか

時には避難すら諦めることもあるのではないでしょうか

でも動物の為に避難しないという選択は絶対に駄目です

伴侶動物は人を死に追いやるためにいるのでは決してないからです

迷って足を止める位ならできる備えを全てして

「可能ならば連れていく」の可能の範囲を限界まで広げ

そのラインを基準に同行を諦める判断にも踏み切って欲しいと思います

そのかわり
置いていく時には
覚悟をしておいて下さい

二度と会えなくなる覚悟
その子の死体を見る覚悟です

台風の際　避難所で

連れてきて
長時間
閉じ込めるのも
かわいそうだし

念の為の
避難だから
大丈夫かなと
思って
置いてきたの

そう語る方に
何人か
お会いしました

「念の為」の避難で
みんな死にました

周囲の人全員がきっと
置いてきた事を「仕方ない」
と言います

あなたが決断や覚悟に感じる重さだけが
その子の命は決して
軽いものではなかった証になります

「自分にはそんな決断はできない」

そう思う方は自身の命を救うためにも動物の避難準備を整えておいて下さい

そして声を上げて下さい一緒に逃げろと言われても行き場がないんだと

もしかしたらそれが動物と一緒に生き残るための一番の備えになるかもしれません

動物を飼育している人の数は自治体が把握しているよりも遥かに多いです

小鳥やハムスターなどエキゾチックアニマルを加えるとまさに数えきれない数の生き物が人間と一緒に暮らしています

そしてその飼い主の多くが避難を迷います

避難所は人間の為にあることも自分が飼育している生き物の命に責任がある立場だということも知っているからです

動物愛護法も改正され
動物の福祉の概念が
変わってきている今
「住民は動物ごと逃げてくる」
を前提とした避難計画が
必要なのだと思います

動物同伴→

逃げない選択をする
人が増えることは
それを探しに行く人
助けに行く人達をも
危険にさらします

「非常時だから」
を免罪符にしている間に
人が死ぬこと

わかってくれる
自治体が増えれば
何か変わるかもしれません

そういった希望から
遠い場所にいる家畜たちと
暮らしている方々

ライフライン断絶時の
電気と水の確保は
やはり必須です

自治体や自衛隊の
給水車は
人間で手いっぱいで
畜舎にはきません

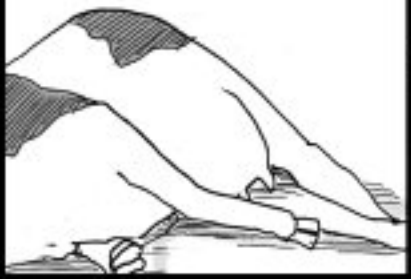
地域の同業者さんと
連携するなどして
対策を講じて下さい

おっぱいがいたいよ

のどがかわいたよ

がんばる牛たちも
7日目位からぽろぽろと
死に始めます

北海道胆振東部地震でも
令和元年房総半島台風でも
停電復旧に十日近くかかっています
もちません



震災後も
人的被害の少ない
長期停電を経験しましたが
救済の輪の外にいる
家畜たちだけが
死んでいきました

災害時一番最初に
切り捨てられる命です

守ってやって下さい

あの震災で奪われた二万の命と
人の暮らし
その隙間に数限りなくあった
動物たちの死骸

未だ何の答えも
見つけられず
結局たどりつくのは
「みんな死なないで」
という子供じみた願いです

あの日の
一日前に戻って

大地震が来るよ
大津波が来るよ
原発が爆発するよ
子供もお年寄りも病気の人も
犬も猫も兎も牛も豚も馬も
みんな連れて逃げようって
叫べるなら
どんなにいいかと思いますが
それは叶いません

伝えることと学ぶこと
それが私たちにできる全てです

一撃で根こそぎ命をさらって行くような星の営みを止める術はありません

どんな悲しい出来事も誰の身にも明日にでも起こり得ます

もしも日常がひっくり返る日が来たら

とにかくとにかく自分と大事な人の命を守って

もしもまだあなたの腕にスペースがあったなら

助けてやってください

その命がきっと生き残った日々を生きていく力になります